

# 「初等科体育」の受講学生における将来の授業担当の 自信に関する検討：ハードル走の場合について

山口奈々<sup>1)</sup> 曾根涼子<sup>1)</sup>

A study on the confidence of students who have taken "Physical Education for Elementary Education" to teach in the future: In the case of hurdle running.

Nana YAMAGUCHI<sup>1)</sup>, Ryoko SONE<sup>1)</sup>

## 抄録

本研究では、小学校教員免許状の取得を希望して「初等科体育」を受講した学生を対象に、将来、小学校でハードル走の授業を担当することに対する自信とその理由について、アンケート調査を行い、横断的・縦断的に検討した。主な結果は以下の通りであった。将来、ハードル走の授業を担当する学生の自信は、受講前には、当該種目に関するこれまでの経験、知識や技能の不足、加えて好意性が低いため平均的に低い傾向があることが明らかとなった。技能面では、示範できると思えるか否かが、授業を担当する自信と密接に関係していた。また、運動・スポーツの経験の多寡、得意・不得意や好意性によって授業を担当する自信は影響を受けるが、過去の経験等に関わらず、受講を通して授業を担当する種目であるハードル走の知識、および技能を習得することによって自信は高められることが示唆された。

**キーワード：**教員養成、小学校教員、体育授業、自信、アンケート調査

---

1) 山口大学教育学部 〒753-8513 山口県山口市吉田 1677-1  
Department of Education, Yamaguchi University, 1677-1 Yoshida, Yamaguchi-city, Yamaguchi 753-8513, Japan

Corresponding author: Ryoko Sone  
E-mail: [sone@yamaguchi-u.ac.jp](mailto:sone@yamaguchi-u.ac.jp)

## 1. 緒言

我が国の小学校では、原則として学級担任を中心に全ての教科の指導が行われていたが、近年では地域や学校の実情を踏まえつつ、様々な工夫を凝らしながら教科担任制の導入が進められている。特に高学年においては、授業の質の向上、多面的な児童理解、小・中学校間の円滑な接続、および教師の負担軽減といった観点から、教科担任制を導入する必要性について述べられ、現在取り組みが進んでいる（文部科学省，2021a）。また、体育については、運動が苦手な児童にもできる喜びを味わわせることが求められていることや、個々の能力に適した指導・支援を行う必要があることなどから、優先的に専科指導の対象とすべき教科の一つに挙げられている（文部科学省，2021b）。しかし、令和4年度に全国を対象として行われた小学校における教科担任制の実施状況調査の結果（文部科学省，2022）では、高学年において、音楽や理科は約6割が専科指導教員によって実施されていたが、体育の実施率は約2割と低かった。また、他学年の体育については大凡1-2割であった。したがって、教科担任制が推進されているが、まだ、学年に関係なく学級担任が体育を指導しているという現状が多くあると考えられる。

しかしながら、小学校教員の体育指導に関する意識等を調査した先行研究をみると、加登本ほか(2010)は悩みを感じている事項などについてアンケート調査を行い、その結果（n=348）から基本的に全教科を受け持つ小学校教員には運動や教材に関する知識不足と運動技能の指導法に力量不足を感じている者が少なくないと推察している。また清水ほか（2019）は、学級担任の小学校教員に対して器械運動の指導に対する意識についてアンケート調査を行った結果（n=121）から教員自身がこれまでに技能を身に付けてこなかったことなどで手本を見せられない（示範ができない）ことや、技の構成要素の理解が難しく、アドバイスするポイントが分からず、児童の技能差をどのように指導・支援すればよいか分からないことなどのため、ほとんどの教員が指導に難しさを感じ、不得意（苦手）意識を持っており、そのようなことが体育指導に大きな影響を与えていると考察している。児童の能力にばらつきがあったり、指導法が分からなかったりなどのため、運動の指導で苦勞があると感じている小学校教員が多いことも報告され

ている（水島，2004）。これらのことから、小学校教員の中には、体育で指導する種目に関する知識の不足や自身の運動技能との関係から指導法が分からないことが原因で、体育授業に自信を持って苦勞を感じながら行っている者が少なくないと考えられる。

教員になる前段階の学生を対象とした先行研究では、浅見（1986）は、教育学部の小学校教員養成課程および養護学校教員養成課程の学生に対して、小学校教員免許状取得に必要な科目である「体育科教材研究」の最終回の時間に、器械運動、水泳、サッカー、および表現運動について授業を担当する自信を尋ねるアンケート調査を行った結果（n=174）を報告している。その報告では、自信がある者の割合は表現運動が全体の10.9%と最も低く、それ以外は27.6-38.5%であり、どちらともいえない者と自信がない者についてはそれぞれ大凡20-40%であったことが示されている。また、示範ができるか否かは指導力の基準にはならないが、それを自信の有無の判断基準にしている種目が多かったと述べられている。最近の研究（木山・國安，2023）でも、教員養成課程の学生において、小学校体育全般について指導の自信、運動観察力、および自身の実技力を身に付けられている意識が十分でないことが示され、学生自身が技能を習得して示範できるようになることや、良し悪しを判断できることが、指導への自信の向上につながると考えられている。また、川田（2018）は、小学校教員免許状取得に必要な科目である「初等科教育法（体育）」の受講学生に現在および過去の運動への苦手意識や好意性（好き嫌い）、体育指導に対する自信や不安などについて初回の授業でアンケート調査を行った結果（n=113）から、運動が不得意なことや運動の好意性が低いことが小学校で体育授業を行う不安と関連することや、不安の内容に自分自身の運動能力を挙げた学生が約35%おり、特に女子で運動能力を不安視している者ほど、授業担当についての不安が大きいことを報告している。この報告では、小学校で体育の授業を行うことに自信がある者は全体の11.5%であり、どちらともいえない者が26.5%、自信がない者が61.0%であった。したがって、自分自身の運動能力や技能が低いことなどによって、体育指導に対して不安を感じたり、自信がなかったりしている者は小学校教員になる前段階から多い状況があると考えられる。

我が国の教員は、研修へのニーズが全体的に高い

が、多忙であるため、参加が困難な状況にあることが報告されている(文部科学省, 2013)。この課題を踏まえた取り組みが進んでいるとしても、教員になるまでに、体育指導に対する苦手意識を軽減させ、自信を高めておくことは積極的な指導につながり重要であり(浅見, 1986; 木山・國安, 2023; 三浦ほか, 2001)、そのためには、どのようなことが自信を高めるのかを授業期間に同じ受講学生に対して繰り返し調査を行う等して縦断的に検討し、対応策を考える必要があると考えられる。しかし、先掲の教員になる前段階の学生を対象とした先行研究では、基本的に一時点において体育指導に対する意識等を問う横断的調査が行われており、授業期間に授業を担当する自信に起こる変化やその要因は検討されていない。

そこで本研究では、小学校教員免許状取得希望者を対象とした「初等科体育」の実技授業で行われた陸上運動のハードル走を取り上げ、将来、小学校で当該種目の授業を担当する自信とその理由について、授業の受講による変化も含め、検討することにした。陸上運動は技能習得に課題がある領域であり(小山・國安, 2023)、ハードル走はハードルを越えられないことが好意性が低い理由に挙がる(小山, 2024)。また、ハードル走は学校以外で行うことが難しい種目のため、大学授業の受講による技能等の変化が自信に及ぼす影響を捉えやすいと考えられる。

## 2. 方法

### 2.1. 調査対象および調査期間

調査対象は、Y 大学教育学部に所属しており、小学校教員免許状の取得を希望し、令和 5 年度に「初等科体育」の授業(2 年配当)を受講した学生 104 名であった。受講学生に体育主専攻の者は含まれなかった。調査期間は令和 5 年 4 月 14 日から同年 7 月 28 日までであった。

### 2.2. ハードル走の授業

「初等科体育」の授業では、専攻などによって受講学生を 4 つ(グループ A、B、C、および D)に分け、最初に全体でオリエンテーション(以下、オリ)を行った後に、ハードル走とタグラグビーを各 3 回、体操・器械運動 6 回をローテーションで実施した。本授業科目の履修について、グループ A、B は全員が必修、C は必修と選択必修(いくつかの科目の中から選択して履修)、D は全員が選択必修であった。

ハードル走の授業は、全てを同一教員 1 名が担当し、基礎的知識に関する理解を深め、実践を通して

技能を習得すること、および練習法や指導法について理解することを目標に実施された。場所は基本的に屋外で行われた。授業の主な内容は、第 1 回が場の設定・確認、ハードルを越える動作(ハードリング)の確認・練習、第 2 回がハードリングの練習、ハードル間をリズムカルに速く走る練習、およびクラウチングスタートからの練習、第 3 回が 50 m ハードル走を走りきる練習と実技試験(ハードル間の走り方やハードリングの評価、およびタイム測定)であった。毎回の授業でビデオ撮影を行って自分の動作を確認したり、学生同士で互いに教え合ったりする時間が設けられた。また、2 つのレポートが課され、一つはハードル走について指導要領を確認して内容をまとめ、基本動作を調べて説明するものであり、提出期間はオリと第 1 回授業の間であった。もう一つは各自の課題をまとめ、課題解決のための練習法や指導法を調べて説明するものであり、提出期間は第 2 回授業と第 3 回授業の間であった。レポートは正しい情報に基づいて作成するように、指導要領以外には、図書や、信頼できる発信元が提供しているインターネット情報を参考にすることを指示された。

### 2.3. アンケート調査

アンケート調査(紙媒体)は、オリ後すぐと、ハードル走の第 1 回授業開始時および第 3 回授業終了時の計 3 回実施した。内容は下記の 1-4 であり、1 と 2 は初回のみ、3 と 4 は 3 回ともに調査した。

内容 1. 運動・スポーツの経験 スポーツクラブや体育会系の部に所属して、運動・スポーツを定期的に行った経験を尋ねた。回答は、幼児期、小学校、中学校、高等学校、高等学校卒業後から現在までの学校種等においてそれぞれ「経験がある」「経験がない」で行わせた。定期的な経験の基準は、国民健康・栄養調査(厚生労働省, 2019)を参考に、運動・スポーツを週 2 回以上行い、それを 1 年間以上続けたことがある場合とした。

内容 2. ハードル走の経験 ハードル走について、体育で授業を受けた経験、およびスポーツクラブや体育会系の部に所属して行った経験を尋ねた。回答は、内容 1 と同様に各学校種等において、授業については「受けた」「受けていない」「覚えていない」、部活動等については「経験がある」「経験がない」「覚えていない」で行わせた。また、部活動等で経験がある場合には、ハードル走が専門種目か否かも回答させた。さらに、ハードル走で怪我をした経験についても尋ね、「経験がある」「経験がない」「覚えていな

い」で回答させた。

内容 3. ハードル走の授業を行う自信と理由 小学校学習指導要領 (文部科学省, 2017) において、中学年で小型ハードル走、高学年で通常のハードル走が取り扱われることになっている。そこで将来、小学校の体育でハードル走の授業を行う自信と理由を中学年と高学年のそれぞれを対象とした場合について尋ねた。自信の評価は、「全く自信がない (1点)」「あまり自信がない (2点)」「どちらともいえない (3点)」「やや自信がある (4点)」「とても自信がある (5点)」の 5 件法で行われた。また、その理由について、表 1 の 13 項目にそれぞれ「全くそう思わない (1点)」「あまりそう思わない (2点)」「どちらともいえない (3点)」「ややそう思う (4点)」「とてもそう思う (5点)」の 5 件法で回答させた。項目 1-6 は川田 (2018) に基づき、項目 11 と 12 は小山 (2024) を参考にした。項目 7-10 と 13 はハードル走の知識と技能に関するものとした。加えてそれら以外に理由があれば自由に記述させた。

内容 4. ハードル走の理解 ハードル走の基礎的知識に関する理解度を測るためにテストを実施した。問題は、ハードル走の用語 (5 問)、走り方、越え方や動作 (9 問)、および場の設定 (1 問) の計 15 問 (各 1 点、15 点満点) であり、小学校学習指導要領 (文部科学省, 2017)、木下・清水 (2005) や清水 (2008) をもとに作成した。また、問題形式は一問一答式 (8 問) と選択式 (7 問) であった。

#### 2.4. 個人情報への配慮等

アンケート調査は成績評価と一切関係ないことを口頭および書面で説明した。また、本研究におけるデータ使用の可否は対象者の自由意志に委ね、アン

表1 自信評価の理由の項目

1. 運動・スポーツの経験が豊富だから
2. 運動・スポーツが得意だから
3. 運動・スポーツが好きだから
4. ハードル走の経験が豊富だから
5. ハードル走が得意だから
6. ハードル走が好きだから
7. ハードル走を行うときの場の設定の仕方についてよく知っているから
8. ハードル走の走り方や、ハードル走の越え方 (動作) についてよく知っているから
9. ハードル走の練習法や指導法についてよく知っているから
10. ハードル走のお手本を見せることができるから
11. ハードル走で怪我をした経験があり怖いから
12. ハードル走で怪我をさせてしまう恐れがあり不安だから
13. 指導要領におけるハードル走の位置付けや系統性についてよく理解しているから

ケート内に記入させた。データは、氏名を ID 化し、個人が特定できないようにして処理した。

#### 2.5. 統計処理

本研究の結果は平均値±標準偏差で示した。一元配置および二元配置の分散分析は Statcel4 (オーエムエス社) を用いて行い、有意な交互作用または主効果が認められた場合にはさらに Bonferroni 法によって多重比較検定を行った。有意水準は 5% 未満とした。

### 3. 結果

ハードル走の全授業に出席してレポートを適切に提出し、アンケートの回答に記入漏れがなく、かつ本研究におけるデータの使用を許可した者は 67 名 (内女子: 34 名) であり、全体の 64.4% であった。全員が実技試験に合格であった。また、グループ A、B、C、および D の人数はそれぞれ 19、11、15、および 22 名 (内女子: 15、7、8、および 4 名) であった。

#### 3.1. ハードル走の授業を行う自信

自信の結果について、授業回数 (オリ、第 1 回、第 3 回) とグループおよび性別を要因としてそれぞれ二元配置分散分析反復測定を行った結果、いずれも授業回数要因の主効果のみ有意であった ( $p < 0.001$ )。また、対象学年による明らかな差はなかった。そこで本研究では、グループおよび男女を分けず、全体 ( $n=67$ ) について高学年の結果のみを示した。

自信の状況は、オリ時には自信ありが 4 点の 10 名と 5 点の 1 名を合わせて 11 名 (16.4 (%))、自信なしが 1 点の 17 名と 2 点の 26 名を合わせて 43 名 (64.2) であり、残り 13 名 (19.4) はどちらともいえないであった。この状況は第 1 回授業時にも同様であったが、第 3 回授業時には自信ありが 4 点の 28 名と 5 点の 3 名を合わせて 31 名 (46.3) に増加、自信なしが 1 点の 4 名と 2 点の 11 名を合わせて 15 名 (22.4) に減少し、どちらともいえないは 21 名 (31.3) であった。自信の点数の変化は、個別にみると、オリと第 1 回授業間 (以下、オリ-第 1 回) に上昇、不変、低下した人数がそれぞれ 8 名 (11.9%)、55 名 (82.1%)、4 名 (6.0%)、

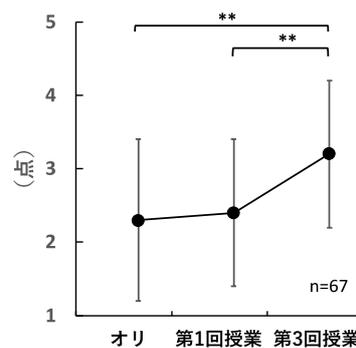


図 1. 自信の変化 \*\* :  $p < 0.01$

第1回授業と第3回授業間(以下、第1-3回)には、それぞれ39名(58.2%)、28名(41.8%)、0名であった。

図1に自信の点数の変化を平均値で示した。自信の点数はオリ-第1回では変化しなかった(平均2.4点)が、第1-3回では有意に変化し、第3回には平均3.3点に上昇した(一元配置分散分析反復測定:  $p < 0.001$ 、多重比較: いずれも  $p < 0.01$ )。

### 3.2. ハードル走の授業を行う自信の理由

図2に、オリ時における自信評価の各理由項目の肯定的(上段)、中立的(中段)、および否定的(下段)な回答の割合を全体、自信がある者と自信がない者のそれぞれについて示した。肯定的回答は、項目1-10と13については「そう思う」「ややそう思う」と「とてもそう思う」、項目11と12については「そう思わない」「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」であり、否定的回答はそれらの逆である。また、中立的回答は「どちらともいえない」である。各項目について肯定的・否定的回答の割合が明らかに高いか否かが自信の有無の主な理由か否かを示すと考えられるため、以下には、回答率が過半数のものを中心に記述した。

まず、ハードル走での怪我の経験と関係した項目11のみ、全体、自信の有無に関わらず肯定的回答率が約80%と同程度に高かった。その他の項目についてみると、全体では、ハードル走に関する項目の否

定的回答率が過半数で、項目4-10と13については70-80%と高かった。自信がある者と自信がない者では、どの項目についても全体と比べてそれぞれ肯定的回答率および否定的回答率がより高かったが、特に、前者は運動・スポーツと関係した項目1-3の肯定的回答率が90-100%、後者は項目4-10と13の否

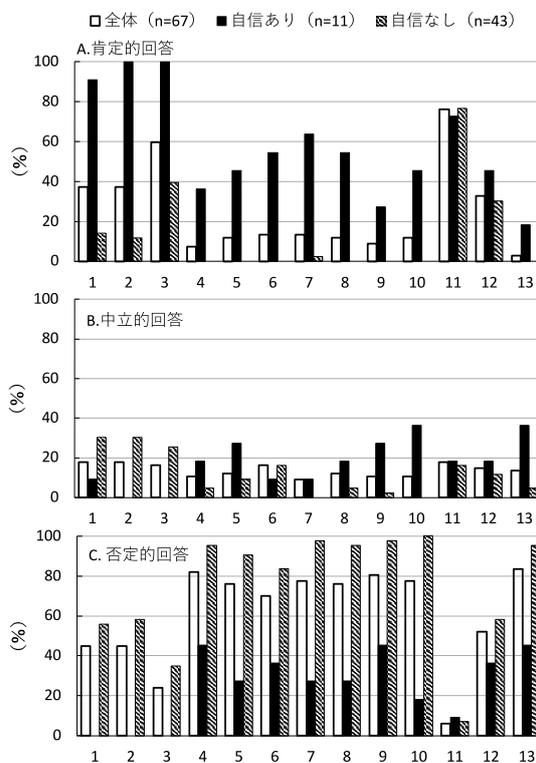


図2 オリエンテーション時における自信評価の各理由項目の回答結果

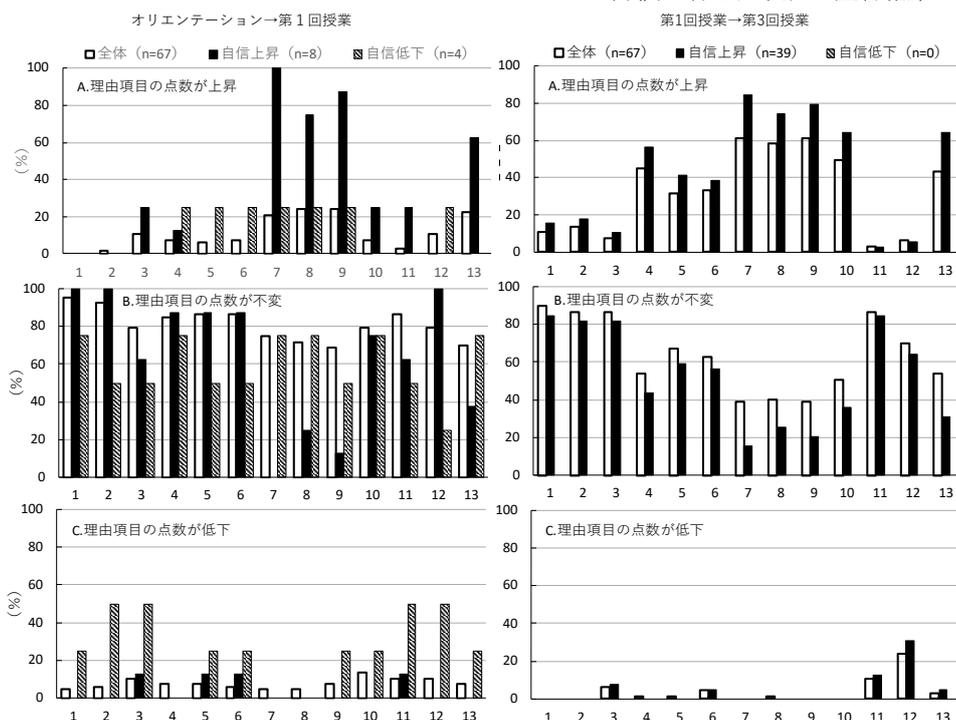


図3 授業間において自信評価の各理由項目の点数が上昇・不変・低下した割合

定的回答率が 80-100% で高かった。また、自信がない者の運動・スポーツに関する項目 1、2 の否定的回答率は過半数で、約 60% であった。

次に自信の変化の理由を検討するため、図 3 にオリ-第 1 回と第 1-3 回のそれぞれにおいて、全体、自信の点数が上昇した者、および自信の点数が低下した者に関して、それぞれ各理由項目について点数が上昇（上段）、不変（中段）、低下（下段）した割合を示した。オリ-第 1 回において、全体では、全項目で不変の割合が明らかに高かったが、自信が上昇した者では、ハードル走に関する項目 7-9 (75-100%) と 13 (62.5%) の点数が過半数で上昇した。この間に自信が低下した者は 4 名と少なく、多くの項目で点数は不変の割合が高かった。第 1-3 回においては、全体では、オリ-第 1 回と比べて、ハードル走に関する項目 4-10 と 13 で上昇の割合が高い傾向があり、項目 7-9 では約 60% で上昇した。自信が上昇した者では、全体と比べて各項目の点数が上昇（項目 11、12 は低下）した割合がより高かった。また、オリ-第 1 回と同様に項目 7-9 と 13 について点数が上昇した割合が高い傾向があったが、加えて、項目 4 (56.4%) や 10 (64.1%) の上昇した割合も高かった。

自信評価の理由について、自由記述欄より、オリ時において、自信がない理由として人に説明したりするのが苦手だから (1 名) と体の変化や成長が児童によって異なるから (2 名) があった。

### 3.3. 運動・スポーツの経験

表 2 に運動・スポーツを定期的に行った経験がある学校種等の組み合わせ別 (16 種類) の人数と割合を示した。全体の中で最も多かったのは「15. 小・中・

表2 運動・スポーツの経験

項目	学校種等				人数	( % )
	幼	小	中	高 高後		
1			経験なし		10	( 14.9 )
2		小			3	( 4.5 )
3			中		4	( 6.0 )
4		小	中		1	( 1.5 )
5		小		高	2	( 3.0 )
6		小		高後	1	( 1.5 )
7			中	高	1	( 1.5 )
8			中	高後	1	( 1.5 )
9				高 高後	1	( 1.5 )
10		小	中	高	14	( 20.9 )
11		小	中	高後	2	( 3.0 )
12			中	高 高後	1	( 1.5 )
13	幼	小	中	高	1	( 1.5 )
14	幼	小	中	高後	1	( 1.5 )
15		小	中	高 高後	20	( 29.9 )
16	幼	小	中	高 高後	4	( 6.0 )
合計					67	( 100 )

幼：幼児期，小：小学校，中：中学校  
高：高等学校，高後：高等学校卒業から現在まで

高・高後」で 29.9%、2 番目は「10. 小・中・高」で 20.9% であった。これらの組み合わせが多い傾向は、時点毎に自信の有無別でも大きく変わらなかった。ただし、3 番目に多かった「1. 経験なし」(14.9%) については、オリ時に全員 (10 名) が自信がないと回答していたが、第 1 回授業時には自信がない者が 6 名に減り、どちらともいえない者が 3 名、および自信がある者が 1 名、第 3 回授業時にはそれぞれ 3、5、および 2 名になり、回を追って自信が上昇した者が増える傾向があった。

### 3.4. ハードル走の経験

表 3 にハードル走の授業を受けた経験について学校種別に人数と割合を示した。どの学校種でも覚えていない者は若干名であった (9-10% 程度)。授業を受けた経験がある者は小・中学校では 79.1、70.1% と多かったが、高等学校については 46.3% で半数弱であった。小・中学校で授業を受けた経験者が多い傾向は、時点毎に自信の有無別にみても大きく変わらなかった。一方、高等学校でハードル走の授業を受けた経験については、オリ時において、自信がある者、どちらともいえない者と自信がない者が、経験がある者 (31 名) ではそれぞれ 8、9、および 14 名、経験がない者 (30 名) では 3、3、および 24 名であり、特に、経験がない者に自信がない者が多い (80%) 傾向があった。その傾向は第 1 回授業時も同様であったが、第 3 回授業時には経験がある者では 19、8、および 4 名、経験がない者では 9、13、および 8 名であり、経験の有無に関わらず先の 2 時点に比べて自信がある者が増加、自信ない者が減少する傾向があり、経験がない者ではどちらともいえない者 (43.3%) が最も多かった。

部活動等でハードル走の経験がある者は 8 名 (11.9%) であった。そのうち専門種目であった者は 3 名で、その全員が全時点で自信があると回答していた。その他の 5 名については、オリ時と第 1 回授業時には自信ありが 2 名、どちらともいえないが 3 名、第 3 回授業時にはそれぞれ 3 名と 2 名であった。

ハードル走で怪我の経験がある者は 6 名 (9%) であり、そのうち 1 名はハードル走が専門であった。

表3. 学校においてハードル走の授業を受けた経験

回答	小学校	中学校	高等学校
	人数( % )	人数( % )	人数( % )
授業を受けた	53 ( 79.1 )	47 ( 70.1 )	31 ( 46.3 )
授業を受けていない	7 ( 10.4 )	13 ( 19.4 )	30 ( 44.8 )
覚えていない	7 ( 10.4 )	7 ( 10.4 )	6 ( 9.0 )
合計	67 ( 100 )	67 ( 100 )	67 ( 100 )

その他の5名についてみると、オリ時には自信なしが4名、どちらともいえないが1名であったが、第1回授業時にはそれぞれ3名と2名、第3回授業時にはそれぞれ1名と2名で、残り2名は自信があると回答していた。また、怪我の経験者の中に項目11に肯定的回答をした者は全時点でおらず、自信がない者の中では否定的回答をした者はオリ時に3名、第1回および第3回授業時に各1名であった。

### 3.5. ハードル走の理解

ハードル走の理解度テストの平均点は、オリ時が $5.5 \pm 1.8$ 点、第1回授業時が $7.8 \pm 2.2$ 点、および第3回授業時が $11.4 \pm 2.0$ 点であり、回を追って高くなった(一元配置分散分析反復測定:  $p < 0.001$ 、多重比較・全時点間:  $p < 0.01$ )。また、自信がある者ではそれぞれ $7.1 \pm 2.5$ 、 $9.2 \pm 2.2$ 、および $12.0 \pm 2.0$ 点、自信がない者ではそれぞれ $5.2 \pm 1.2$ 、 $7.2 \pm 2.1$ 、および $10.8 \pm 1.4$ 点であり、授業回数と自信の有無を要因とした二元配置分散分析の結果、理解度テストの得点は、自信がある者の方が自信がない者よりも有意に高かった(交互作用: 非有意、時間・自信の有無:  $p < 0.001$ )。

## 4. 考察

本研究では、小学校教員免許状の取得を希望し、「初等科体育」のハードル走の授業を受講した学生を対象に、将来、小学校で当該種目の授業を行う自信と理由を調査し、検討した。以下に、1. 受講前の状況、2. 受講による変化の順に考察を記述した。

### 4.1. 受講前の自信とその理由

「初等科体育」のオリ時点で、将来、小学校でハードル走の授業を行う自信がある者は全体の16.4%、自信がない者は64.2%であった。また、自信は平均2.4点であり、これは「あまり自信がない」と「どちらともいえない」の間であった。したがって、オリ時の自信は平均的に低い傾向があった。この所見は、自信の結果に性差はなかったため男女込みの分析結果にもとづくが、本研究と同様に小学校教員免許状の取得を目指す学生を対象として、小学校で体育の授業を行う自信や不安を調査した川田(2018)は、性差を認めていた。すなわち、男女ともに不安を感じていたが、女子の方がより強く、自信ありの割合も低かった(男子: 16.3%、女子: 6.9%)。この性差に関する所見の不一致には、運動経験の違いなどが自信や不安の性差の原因として考えられていたり(川田, 2018)、種目によって自信が異なったり(浅見, 1986)することから、授業を行う種目が、本研究では

性別に関わらず多くの学生が学校体育でしか経験のないハードル走限定であったが、先行研究では体育全般であったことが関係しているのではないかと考えられる。

次に、オリ時の自信の理由について検討する。自信評価の理由項目への回答結果(図2)より、ハードル走に関する項目(項目11を除く。理由は後述する。)の否定的回答率が明らかに高く、項目4-10と13は全体で70-80%、自信がない者では80-100%であった。したがって、オリ時の自信が低い傾向を示した理由として、ハードル走に関する経験、知識や技能の不足、加えて好意性が低いことが考えられる。実際、理解度テストの正解率は平均37%と低かった。また、技能面について、自信がない者では、項目10の否定的回答率が100%であり、例外なく、示範できないことが自信がない理由に挙がることが認められた。これは、小学校教員とその前段階の学生のいずれを対象とした先行研究(浅見, 1986; 木山・國安, 2023; 清水ほか, 2019)でも述べられているように、指導する種目の技能を習得していないことが示範できない要因になり、そのために指導が難しいと感じたり、不得意(苦手)意識を持ったりするためではないかと考えられる。加えて、陸上種目の中でもハードル走は高跳びとともに恐怖心が芽生えやすく好意性が低いことが示唆されており(小山, 2024)、そのようなことが自信に影響したことが推測される。

自信がある者では、全体と比べてハードル走に関する項目の否定的回答率は低く、肯定的回答率が高かったが、大凡20-60%であった。また、理解度テストの正解率も約半分であった。一方、運動・スポーツに関する項目については、自信がない者では否定的回答率が過半数のものもあったが、自信がある者では全てで肯定的回答率が90-100%であった。先行研究(川田, 2018)において、相関分析の結果をもとに、運動やスポーツに対する得意・不得意や好意性が体育全般の授業を行う自信と関連することが考えられているが、本研究は、ハードル走に種目を限定した場合でも、運動・スポーツについて経験が豊富、得意や好意的なことが、授業を行う自信を持てる理由になることを明らかにしている。また、一部の者では、それらが自信に及ぼす正の影響が、ハードル走自体に関する経験、知識や技能の不足等による負の影響を凌駕し、自信があると感じられたことを示唆している。

しかしながら、運動・スポーツの経験を学校種等

の組み合わせで表した結果と、授業を行う自信の有無に一定の関係は認められなかった。このことには、その経験の内容(種目、頻度、期間等)の影響等があるのではないかと推測される。また、オリ時に自信があると回答した者の約半数は授業以外でハードル走を行った経験があり、そのようなより直接的な経験のある者の中に自信がないと回答した者はなく、専門で行っていた者はいずれも自信があると回答していた。このことは、専門性が高いことが体育指導を行う自信を高くする(木村ほか, 1991)という先行所見と一致している。一方、本研究では運動・スポーツを定期的に行った経験のない者が14.9%いたが、その全員がオリ時に項目1に否定的回答をしており、授業を行う自信はなかった。したがって、運動・スポーツの経験の不足は授業を行う自信がないことと密接に関係すると考えられる。

ハードル走の授業は、小・中学校では多くの者が受けており、その経験によって授業を行う自信に明らかな差はなかった。一方、高等学校では授業を受けた経験がある者が全体の半数弱であり、オリ時には経験がない者に自信がない者が多い傾向があった。多くの学生はハードル走を学校でしか経験しておらず、そのような種目では体育で実施しなければ運動経験が少なく、それが運動の習得を妨げ、教員になった場合には不安や苦手意識を抱かせることが考えられている(水島, 2004)。これらのことから、特に直近でもある高等学校における体育でのハードル走の経験が運動の習得、ひいては授業を行う自信に影響した可能性があるのではないかと考えられる。

ハードル走で怪我をした経験があり怖いからという項目11については自信の有無に関わらず肯定的回答率が約80%であった。この結果は怪我の経験者が全体の9%と少なかったことと関係していると考えられる。実際、怪我の経験者のみで見ると、肯定的回答をした者はおらず、半数は否定的回答をしていた。また、否定的回答をした全員に授業以外でハードル走の経験はなく、自信はなかった。したがって、当該種目に関して、特に限られた経験の中で怪我をしたことがあると、恐怖心を抱いており、それ自身が授業を行う自信を低くすることが少なくないと推察される。

以上のことから、大学においてハードル走の授業を受講する前の時点において、将来、小学校で授業を行う学生の自信は、当該種目に関する経験、知識や技能の不足、加えて好意性が低いために低い傾向

があること、および技能面では、例外なく示範ができないことが自信がない理由として挙がることが示された。また、運動・スポーツの経験の多寡、得意・不得意や好意性が、授業を行う自信に影響することも示された。加えて、部活動や、特に高等学校の体育でハードル走の経験があることは自信を高め、怪我の経験があることは自信を低くすることに関係することが示唆された。

#### 4.2. 受講による自信の変化とその理由

本研究において、将来、小学校でハードル走の授業を行う学生の自信は、平均値ではオリ-第1回では変化せず、第3回に上昇したが、個別にみると、各時点間で自信が上昇、もしくは低下した者もいた。そのため、それぞれにおいて、自信評価の各理由項目の点数が上昇、不変、および低下した割合を求め、その結果(図3)などをもとに、自信の変化と理由について以下に考察した。

本研究では、グループによって「初等科体育」が必修か選択必修か、およびオリとハードル走の第1回授業間における他の種目の授業の受講状況が異なったが、自信の変化にグループ間で差はなかった。したがって、ハードル走の授業を行う自信は、必修か否か、他の実技種目の授業を受講することの影響を受けないことが示唆された。また、オリ-第1回において、全体では、全ての理由項目で点数は不変の割合が明らかに高く、これは自信に変化がなかったことと矛盾しなかった。一方、この間に自信が低下した者(4名)については明らかな理由を示す結果は認められなかったが、自信が上昇した者では、ハードル走に関する項目7-9と13について点数が上昇した割合が明らかに高かった。オリ-第1回には、受講学生はハードル走について、指導要領の内容や、基本動作に関するレポートを作成した。そのため、この間に自信が上昇した者では、レポート作成によって当該種目の行い方(場の設定を含む)、動作などに関する知識が増え、理解が進んだことによって、自信を高めたことが推測される。しかし、自信が上昇した者は全体の11.9%であった。また、理解度テストの点数はオリ時に比べて第1回授業時に高くなったが、正解率は52%であった。したがって、レポート作成によるハードル走に関する知識の習得のみでは、当該種目の授業を行う自信を平均的に高めるまでの効果は得られないと考えられる。

次に、第1-3回において、学生はハードル走の実技授業を3回受講し、練習法や指導法に関するレポ

ートを作成した。この間の各理由項目の点数の変化は、全体では、オリ-第1回と比べて、ハードル走に関する項目全般で肯定的に点数が変化(項目11と12は低下、それら以外は上昇)した割合が高まった。また、自信が上昇した者では、オリ-第1回と同様に項目7-9と13の点数が上昇した割合が高かったが、項目4-6と10についても点数が上昇した割合が高まった。全体の理解度テストの正解率は、第3回授業時に76%に上昇した。したがって、自信が平均的に上昇した理由は、特には当該種目について行い方(場の設定を含む)、走り方や越え方、練習法や指導法について知れたことによると考えられる。また、これらの効果は、レポート作成を通してハードル走に関する内容を繰り返し学習し、知識の定着を図れたり、新たに、課題解決のための方法に関する知識を得られたりしたこと、および実際に実技を行うことで、学んだ知識を自分自身の感覚を伴ってより深く理解できたりしたことで得られたことが推測される。加えて、当該種目の経験が増え、技能が高まり、示範できると思えるようになったことも自信を高めたと考えられる。

本研究において、運動・スポーツを定期的に行った経験がない学生についてみると、オリ時には全員自信がなかったが、受講を通して自信が上昇した者が増える傾向があった。また、高等学校の体育でハードル走の授業を受けた経験がない者は、最初は多くの多くは自信がなかったが、第3回授業終了時には自信がない者が減り、自信がある者が増え、どちらもいえない者が最も多くなった。これらのことは、運動・スポーツやハードル走のこれまでの経験に関わらず、大学での実技授業の受講を通して知識や運動を習得できることによって自信が高まることを示唆すると考えられる。

以上のことから、「初等科体育」のハードル走の授業において、当該種目に関する知識のレポート作成を通して得ることに加えて実技を行うことによって、場の設定の仕方、走り方や動作、練習法や指導法が実際的に分かるようになることで、過去の経験に関わらず、将来、小学校で授業を行う学生の自信は上昇することが示唆された。また、運動の学習において示範は重要な指導法の一つとされ(水島, 2004)、示範ができるかどうかは体育指導の自信に影響すると述べられている(浅見, 1986; 木山・國安, 2023; 清水ほか, 2019)が、実際、実技授業への取り組みを通して示範ができると思えるようになることが授業

を行う自信を上昇する理由になることが示された。ただし、運動能力が高いことと体育授業ができることは必ずしも結びつかず(川田, 2018)、示範能力は実技指導力の一部であり、指導力の基準にならないと考えられていること(浅見, 1986)や、自分の経験ばかりに頼り、型にはめた指導は望ましくないと考えられていること(水島, 2004)を頭に置いておくことが重要である。

本研究の限界として、まず解析対象としたデータが全体の64.4%であったことが結果に偏りを生じさせた可能性が考えられる。しかし、解析対象外としたデータの大部分(27.9%)について、その理由は学部特有の事由(実習関係)での欠席であった。また、本研究では授業を全て受講してレポートを正しく作成・提出し、実技検査も合格した者のデータを解析対象とした。したがって、そのことが結果を変えた可能性は低いと考えられる。次に、自信の理由について、本研究では種目特性や先行研究(川田, 2018)の結果などをもとに理由項目を作成して回答させ、自由記述もできるようにしたが、浅見(1986)や木山・國安(2023)において児童の技能を高める自信につながると考えられている運動観察力(児童の技能の良し悪しの判断の可否)のような理由は挙がらなかった。これは、本研究では木山・國安(2023)のように授業を行う自信を技能向上に限定して尋ねなかったことなどが影響したのではないかと推測される。また、自由記述された理由は、自信がないことについて人に説明するのが苦手だから、体の変化や成長が児童によって異なるからといったもののみであった。前者は本研究の目的との関係から検討対象外とした。また、後者は発育発達に応じた指導に関する内容であるが、練習法や指導法に関わることでもあるため、理由項目に含まれるように思われる。最後に、調査対象者(学年を含む)や授業の行い方などが結果に影響する可能性はあると考えられるが、本研究では横断的な検討に加えて短い期間ではあるが同じ受講学生を3時点で調査し、縦断的な検討も行っており、自信の変化とその理由の対応関係を示すことができたと考えている。

## 5. まとめ

小学校教員になる前段階の学生の体育指導に対する意識等に関して、大学での実技授業の受講を通して変化や要因を検討した報告は見当たらない。そこで本研究では、小学校教員免許状取得を目指す学生

を対象に、将来、小学校でハードル走の授業を行う自信と理由について、大学における当該種目の授業の受講による変化を含め、アンケート調査を行い検討した。その結果、授業を行う自信は、平均的に低い傾向にあるが、場の設定の仕方、走り方や動作、練習法や指導法などについて知識をレポート作成で得ることに加えて、実技で理解を深め習得することで高まることが示された。また、技能面では、示範できると思えるか否かが、自信と密接に関係していた。加えて、運動・スポーツについて、経験が豊富で得意と思っていたり、好意的に捉えたりしていることは自信を高め、逆に経験の不足は自信を低くするが、過去の経験等に関わらず、当該種目のレポート課題および実技授業による知識および技能の習得によって自信を高められることが示唆された。本研究の結果を踏まえると、特に、将来、体育授業で担当する自信がない運動種目については、当該種目に実際に取り組み中で知識（練習法・指導法を含む）や技能を習得しておくことが自信の向上、ひいては将来における積極的な指導につながり、大切であると考えられる。しかしながら、大学における体育実技の授業で行われる種目は限られるため、学び合える仲間と実践する等、積極的に機会を作り、行うことが推奨される。

## 引用文献

- 浅見裕 (1986) 教育学部学生が持つ体育指導の自信について. 岩手大学教育学部附属教育工学センター教育工学研究, (8) : 11-36.
- 加登本仁・松田泰定・木原成一郎・岩田昌太郎・徳永隆治・林俊雄・村井潤・嘉数健悟 (2010) 体育授業の悩み事に関する調査研究(その1) —教職経験に伴う悩み事の差異を中心として. 学校教育実践学研究, 16: 85-93.
- 川田裕樹 (2018) 「初等科教育法(体育)」受講者における運動への苦手意識と好意性および体育指導への不安—男女の差に着目して. 國學院大學人間開発学研究, (9) : 23-37.
- 木村博人・太田雅夫・小泉昌幸・須田洋・鈴木良則・三浦康暢・須田柳治 (1991) 体育教師の意識・行動に関する研究—高等学校男性教師の調査から. コーキング学研究, 4 (1) : 1-8.
- 木下光正・清水由 (2005) 陸上(苦手な運動が好きになるスポーツのコツ: 2). ゆまに書房, pp.16-21.
- 木山慶子・國安花菜子 (2023) 小学校教員養成に関わる体育授業の在り方についての研究—体育指導に対する意識に着目して. 日本女子体育連盟学術研究, 39 : 25-34.
- 厚生労働省 (2019) 令和元年国民健康・栄養調査結果報告. <https://www.mhlw.go.jp/content/001066903.pdf>, (参照日 2024年2月4日).
- 小山宏之 (2024) 「小学校教科内容論体育」受講者の体育授業および陸上運動の授業に対する意識の変容に関する研究. 教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要, (6) : 165-174.
- 三浦裕・小林禎三・片岡繁雄 (2001) 教科専門科目「小学体育」に対する受講学生の意識・態度について. 北海道教育大学紀要, 52 (1) : 197-208.
- 水島宏一 (2004) 器械運動の指導に関する研究. 東京学芸大学紀要第5部門芸術・健康・スポーツ科学, 56: 103-119.
- 文部科学省 (2013) 我が国の教員(前期中等教育段階)の現状と課題—国際教員指導環境調査(TALIS)の結果概要. [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_ics/Files/afieldfile/2014/06/30/1349189\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_ics/Files/afieldfile/2014/06/30/1349189_1.pdf), (参照日 2024年2月4日).
- 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領(平成29年度告示) 解説体育編. 東洋館出版社.
- 文部科学省 (2021a) 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して—全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現(答申). [https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\\_syoto02-000012321\\_2-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf), (参照日 2024年2月3日)
- 文部科学省 (2021b) 義務教育9年間を見通した教科担任制の在り方について(報告). [https://www.mext.go.jp/content/20210729-mxt\\_zaimu-000015519\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210729-mxt_zaimu-000015519_1.pdf), (参照日 2024年2月3日).
- 文部科学省 (2022) 令和4年度公立小・中学校等における教育課程の編成・実施状況調査の結果について. [https://www.mext.go.jp/content/20230419-mxt\\_kyoiku02\\_000029047\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230419-mxt_kyoiku02_000029047_02.pdf), (参照日 2024年2月3日).
- 清水清志・塩原茂・金子伊樹・関口明宏・高橋珠実・新井淑弘 (2019) 小学校教諭の器械運動指導に関する意識について—群馬県A市小学校教諭に対する意識調査から. 群馬大学教育実践研究, (36) : 107-116.
- 清水由 (2008) 陸上(小学校体育写真でわかる運動と指導のポイント). 大修館書店, pp.48-53.